

空間を演出するための音楽 — ギャラリーのための音楽をつくる —

(音楽教育講座音楽デザイン研究室) 井上 洋一

Music for producing a space — Make music for the art gallery —

Yoichi INOUE

(平成24年6月5日受理)

1 はじめに

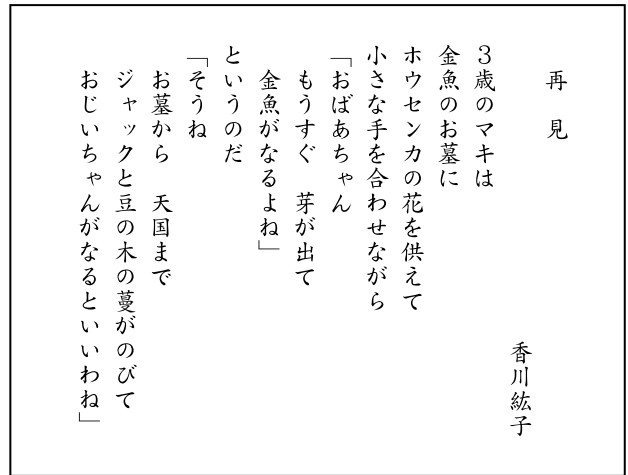
筆者は、本学部音楽教育講座において、音楽理論、作曲分野の科目を担当している。学生への作曲指導を行うとともに、筆者自身も創作活動を行ってきた。現在はその多くが、個人や団体からの依頼に応じるものである。依頼者の求めによって、オリジナル作品、編曲作品、器楽曲、合唱曲等々、ジャンル、編成や形態も様々であるが、創作に向かう根本的な姿勢、基本的な作曲方法について深く考えることはあまりなくなってきた。歌詞が先にあたり、どういう場で演奏されるのが、誰が演奏するのかが決まっていたりして、完成後の作品のイメージは、ほぼ予想できる。

かつては、自身の作品発表のため、あるいは家族や友人のために、イメージの創出そのものからスタートしていた時もあった。想いを巡らせながら、楽器編成、DTM (Desktop Music) の場合は音源や音色の吟味を行い、作曲技法、制作に用いるツールとしてDTMソフト等を選び、使用法をマスターしようとする意欲を持って、創作活動にのぞんでいたのである。

2 詩人とのコラボレーション

1993～94年に「愛媛詩話会」「愛媛作曲協議会」の共催で開催した「サウンド&ポエムセレブレーション」と題した演奏会は、現代詩のイメージに基づく作曲と演奏発表、または、音楽作品のイメージに基づく詩の創作と朗読を行うユニークな演奏会であった。筆者は、この演奏会に際し、DTM作品として「再見」(1993)、「The Cycles of LIFE」(1994)を発表した。「再見」は、車椅

子の詩人として著名な香川絃子さんの詩のイメージをもとにしている。



筆者は、1993年に長女を病気で亡くしている。この詩と娘の生前の初節句に撮影した写真のイメージが重なり、ペンタトニックによる素朴なメロディ、リコーダーと箏のアンサンブルによる楽想が自然に湧出した。

この演奏会は、筆者にとって、その後のDTM作品群を発表する契機となった。詩人との交流、コラボレーションは、音楽創作への新鮮な意欲を喚起させてくれた。

3 研究の目的

筆者は、2010年から、千葉県在住の造形作家、青呼氏の依頼により、氏の個展会場のための音楽制作を行っている。この音楽制作は、先述した詩人とのコラボレーション同様、自身の創作活動に向かう姿勢を見直し、あらたな創作方法へ取り組むよい機会となっている。

本論では、この音楽制作過程を振り返り、用いてきた

作曲上の手法・技法を整理するとともに、音楽と造形芸術との接点、相違点、および音楽と他の芸術分野とのコラボレーションがもたらす効果、意義等について考察する。

4 愛媛大学ミュージアムのための音楽

青呼氏とのコラボレーションについて述べる前に、「愛媛大学ミュージアムのための音楽」(2009)についてふれておく。このミュージアムの音楽を筆者が担当したことが青呼氏に伝えられ、氏との接点となった。

愛媛大学ミュージアムは、愛媛大学の学術研究活動の成果を公開・発信することを目的として、2009年11月に開館した大学博物館である。常設展示は、4つのゾーンから成り、各ゾーンはさらに小ブースに区分されている。小ブースには、展示物に並んで液晶モニターが置かれ、スライドショーによる解説が常時なされている。

【第1ゾーン 進化する宇宙と地球】

- 岩石・鉱物 音楽…M1
- 古生物…M2
- 地球深部…M3
- 宇宙進化…M4

【第2ゾーン 愛媛大学と愛媛の歴史】…M5

- 愛媛の歴史
- 愛媛大学の歴史

【第3ゾーン 生命の多様性】

- 環境科学…M6
- 昆虫…M7
- 生命科学工学…M8

【第4ゾーン 人間の営み】

- 文京遺跡…M9
- 古代鉄文化…M10

上記M1～10が液晶モニターの設置箇所であり、そのモニターのスピーカーを通して流される音楽が「愛媛大学ミュージアムのための音楽」である。(筆者はM1～8を担当し、M9・10は音楽学研究室の岸啓子教授が担当した。)

ミュージアム開館に向けた準備担当者から、音楽について要望された事項は「音楽らしくない音楽」「繰り返

し流しても(展示の)じゃまにならない音楽」「1曲3分程度」「楽譜は不要、音声データ(MP3)で渡してほしい。」というものであった。筆者にとっては、演奏する、聴くという通常の目的以外の音楽を制作する初めての経験となった。

5 目的とならない音楽

演奏すること、聴くことを主の目的とせず、他のものを引き立たせ、その場の空間を演出する音楽として、「環境音楽」「BGM」「サウンドトラック」「サウンドスケープ」等がある。しかし、本論では、これらの音楽を論じ類型化することを意図していない。ここでは「愛媛大学ミュージアムのための音楽」の制作過程を振り返って、音楽制作に用いた方法、コラボレーションの際の留意点について述べる。

(1) ループシーケンサーの使用

担当した8曲とも、DAW(Digital Audio Workstation)ソフトで制作した。楽譜は必要なく、リアルタイムで演奏や音声を録音・編集し、エフェクト処理を施して完成させた。今回は、直感的な操作が可能で初心者でも扱いやすいSteinberg社「Sequel 2」を用いた。図1は「Sequel 2」によるM6「環境科学」の編集画面である。

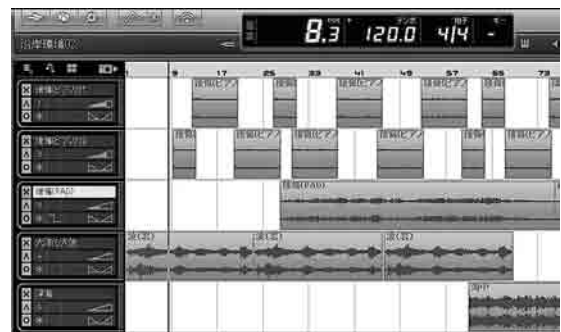


図1 M6「環境科学」の編集画面

「Sequel 2」はループシーケンサーに類別されるDAWソフトである。ループシーケンサーでは、電子楽器の演奏データ(MIDIファイル)、音声やアコースティック楽器、自然音や効果音の音声データ(WAVデータ)等をループ素材としてトラック上に自由に貼り付け、パズルのように音楽を組み立てていく。

(2) 楽音と雑音、音楽的要素の有無

最初に提出したM6「環境科学」は、展示のイメージ

と合わないということから、全面的に改訂を行うことになった。改訂前の音楽は次の8トラックから成る。

トラック1	MIDI	アコースティックピアノ
トラック2	MIDI	電子ピアノ
トラック3	MIDI	ストリングス
トラック4	MIDI	コーラス
トラック5	MIDI	ベース
トラック6	MIDI	ハーブ
トラック7	WAV	水 (波の音)
トラック8	WAV	水 (海中の泡のはじける音)

トラック1～6は、旋律、ハーモニー、リズムという、いわゆる音楽の三要素をもち、そこにトラック7・8の噪音である効果音を被せたものであった。

筆者は、事前に依頼者から「愛媛大学沿岸環境センター」のパンフレットを受け取り、美しい海の風景の写真から「歌いたい気持ち」でトラック1～6を制作した。結果「音楽らしい音楽」となってしまった。

改訂後の音楽は、次のトラックから成る。

トラック1	WAV	アコースティックピアノ (即興)
トラック2	WAV	アコースティックピアノ (即興)
トラック3	WAV	ストリングス (背景音)
トラック4		水の音 (波の音)
トラック5		水の音 (海中の泡のはじける音)

改訂前のデータから噪音であるトラック4・5を残し、そこに楽音であるピアノ、ストリングスを被せた。そして、MIDIではなく、即興でつま弾いたピアノの生音、自由なハーモニーで漂うように表現したストリングスをWAVで貼り付けた。楽音であっても、ほとんど音楽的な要素をもち、楽音による効果音である。

噪音と楽音では全く異なった音楽になる。また、音楽

の要素を持つか、記譜できる音楽か、即興性なども関連する。

ミュージアムオープンの初日、第3ゾーンの環境科学のブースは、深刻化する環境問題を問う展示であること

を知った。ウェッデルアザラシの標本の目が、痛々しく訴えかけ、「イメージに合わない」という依頼者の言葉に改めて納得した。

ミュージアムの音楽は、研究者、学芸員、展示担当者らとのコラボレーションである。展示物の内容や正しいイメージの共有がなければ、適切な空間の演出はできない。

6 作家との出会い

本論で述べる作家、青呼氏は以下の経歴を持つ。

青呼 Seiko

画家・人形作家

愛媛県出身 千葉県在住

2005年 画家 瀬戸栄美子氏 師事

2008年 9月 きゃら子誕生

2009年 9月 SEIKO「きゃら子の世界」展
GINZA GALLERY HOUSE (銀座)

2009年 11月 JUJUBEEにて企画展開催

2010年 8月 SEIKO展「～ Dear Lee～」

2011年 8月 SEIKO「きゃら子の世界」展
GINZA GALLERY HOUSE (銀座)

2012年 5月 青呼「きゃら子の世界」展
東京国際フォーラム
FORUM ART SHOP GALLERY (有楽町)

青呼氏は自身のことを、趣味の延長で描いているだけのアマチュア作家という。事実、正式に絵を学びはじめてから、というより、絵を描きはじめてからそれほど長くはない。しかし、氏が描く絵の中に登場する「きゃら子」が話題となり、多くの画廊が点在する銀座で個展を開催するほどとなった。画商の間でも、かなりの集客が期待できると評判の人気作家である。

実は、筆者と青呼氏は、同郷である。さらに、青呼氏の姉は、筆者の高校、大学の後輩であることから、青呼氏との面識はあった。今回のコラボレーションは、30年振りの再会である。



作品1 きゃら子とぶぶ子のおもちゃ箱

7 癒しの世界

このきゃら子の誕生について、青呼氏はこう述べている。

私には重度の障害を持った娘がいました。部屋にこもって介護の日々の中、ふと母の遺品の古布に目が止まりました。何かを作りたい、そばにいて欲しい、そんな思いで作りはじめて生まれてきたのが「きゃら子」という人形です。

きゃら子は唇が分厚く個人的な容姿ですが、おしゃれが大好きで前向きな女の子です。そして私自身、情の厚い人達に囲まれ幸せに暮らしています。

その象徴としてこの唇が出来上がってきました。たくさんの笑顔、楽しさを届けたいという願いを込めて不細工だけど可愛い「ぶさ可愛いきゃら子」の世界を作っています。

青呼氏にとって、きゃら子は娘の投影である。介護で忙しい日々の中、きゃら子の絵を描くこと、人形を作ることは、娘との語りであり、癒やしの時間であったと察する。

残念ながら、2010年6月、お嬢様は他界した。しかし、きゃら子は、今も多くの人に愛され、きゃら子人形は抱かれ続けている。

青呼氏は「ぶぶ子」というきゃら子と対照的なキャラクターも登場させ、絵、人形、インスタレーションを組み合わせ、おもちゃ箱のようなユニークな「きゃら子の世界」を創出する。そしてきゃら子誕生のエピソードを知る人も知らない人も「きゃら子の世界」に温かい情を感じ、癒され、涙を流す。

8 3つのコラボレーション

(1) SEIKO展「～ Dear Lee～」のための音楽

この個展は、青呼氏とお嬢様との関わりの中で生まれたインスタレーションの世界である。娘との別れの直後であり、娘への追悼の意を込めた個展であった。



作品2 思いの層

この個展が、筆者と青呼氏との初コラボレーションである。「愛媛大学ミュージアムのための音楽」同様に「音楽らしくない音楽」、特定の絵やインスタレーションのための音楽ではなく、空間全体を演出する音楽を提供してほしいとのことであった。そこで「愛媛大学ミュージアムのための音楽」と同様の手法で、ループシーケンサーを用いた楽音+噪音のミックスを行った。この個展には、「愛媛大学ミュージアムの音楽」から青呼氏が選曲した数曲と、この個展のために書き下ろした「Budding」「Homecoming」の2曲を提供した。

次は「Budding」のトラック構成である。

トラック1	MIDI	フルート (即興)
トラック2	MIDI	パッド系シンセサイザー (即興)
トラック3	MIDI	ストリングス (即興)
トラック4	MIDI	ハーブ (即興)
トラック5	MIDI	バス
トラック6	MIDI	風の声 (即興)
トラック7	WAV	せせらぎの音

楽音と噪音の配分という点では、トラック1～5が楽音であり、さらに、旋律、ハーモニー、リズムも持ったむしろ「音楽らしい音楽」である。ただし「反復」「即興」を特徴とし、特に形式はない。トラック4のバスは正確に「G-E-C-D」の4音を反復し、そこに、パッド系シンセサイザー、ストリングス、ハープで、「G-Em-C-D7」のコードをあいまいに演奏する。多少ずれるぐらいがよい。そして、トラック1にフルート（というより笛に近い音）で即興的な旋律を重ねる。トラック7では、あえてサンプリングされたWAVの風の音ではなく、シンセサイザーで合成した風の音を、MIDIキーボードを用いて即興的に演奏し、楽音と噪音のセッションを試みた。

曲題の「Budding」は芽生えであり、再生をイメージする。風やせせらぎの音は、郷里の春を想起させる。筆者も、我が子に先立たれる共通の経験をしているが、筆者の場合は、春の彼岸の季節であった。筆者は、この描写的な音楽で、青呼氏のお嬢様への追悼の意を表した。

(2) SEIKO「きゃら子の世界」展のための音楽

個展のための音楽の打合せは、青呼氏の里帰りに合わせて、筆者の研究室で行った。

青呼氏は「ぶさ可愛いきゃら子は、幼い子供のように見えるが、恋もしたいし、おしゃれもしたい、大人の世界に憧れる普通の少女である。今回の個展の音楽は、可愛いだけの音楽ではなく、大人の音楽をリクエストしたい。」と語った。

研究室のピアノで、筆者が、7thや9thコードを含んだJAZZ風のフレーズを即興で弾いてみたところ「それで、お願いします。」ということになった。

ピアノソロ、即興的、大人の雰囲気キーワードに音楽制作を行うことにした。

この音楽制作では、特に音楽ソフトは必要ではなかった。ピアノの即興演奏をPCMレコーダーで記録し、使えそうな部分だけを抜き出して、曲集に構成し音楽CDを作成した。曲集全体のタイトルは「LIFE -Sound Sketch for Kyarako-」とし、個展会場では、このCDをBGMとして流した。また、音楽完成後に決定したことであるが、筆者が個展会場に赴き、1度だけのライブ演奏を行った。

LIFE -Sound Sketch for Kyarako-

- 01 Daily life 1 (日常1)
- 02 Sickness (病魔)
- 03 Busy mother (多忙な母)
- 04 Healing (癒やし)
- 05 Shake (動揺)
- 06 Future 1 (未来1)
- 07 Slight fever (微熱)
- 08 Daily life 2 (日常2)
- 09 State of lull (小康状態)
- 10 Grandma (おばあちゃん)
- 11 Future 2 (未来2)
- 12 Dressing up (おしゃれ)
- 13 Time to write diary (日記を書く時間)
- 14 Haste (焦り)
- 15 Daily life 3 (日常3)
- 16 Girl's dream (少女の夢)
- 17 Future 3 (未来3)

「きゃら子の世界」を「青呼一家の生活」ととらえ、曲順を決め「LIFE -Sound Sketch for Kyarako-」を構成した。

The musical score for 'Daily life (日常)' is presented in piano accompaniment. It features a 4/4 time signature and a key signature of one flat (B-flat major). The score is divided into two systems, each with four measures. The chords for the first system are Cmaj7, Am9, Fmaj7, and G7sus4 G7. The second system has chords Cmaj7, Am9, Fmaj7, Dm7-9, G7sus4, and G7. The third system has chords A/maj7, Gm, A/maj7, and Gm. The fourth system has chords A/maj7, Gm, A/maj7, and Bb7. The fifth system has chords Eb, Cm7, Ab7, F#dim, G7sus4, and G7. The sixth system has chords Cmaj7, Am9, Fmaj7, and G7sus4 G7. The piano part consists of a simple, rhythmic accompaniment in the right hand and a more active line in the left hand.

譜例1 Daily life (日常)

「Daily life」は文字通り、平穏な日常生活を表現する。スケッチに記したコード進行を元に即興で演奏した別テイクを3回使用した。青呼氏がリクエストした7thや9thコードを含んだコード進行である。(譜例1)



譜例2 Sickness (病魔)

「Sickness」は全て即興演奏のため記譜しない。(譜例2)は冒頭の演奏例を示しただけにすぎない。セリーのような音列によるのではなく、幹音と派生音、つまり白鍵と黒鍵を適当に散りばめ、指の間隔を広げたり狭めたりしながら、なるべく調が確定しないように弾く。また、音量、リズムも不規則に変化をつける。



譜例3 Busy mother (多忙な母)

この曲集では、即興性が重要な要素であるが、合わせて、オスティナートを多用している。「Busy mother」では、アクセントのついた変拍子の音形を、正確なリズムと一定のテンポで反復する。介護・家事・創作活動で忙しい母、生活に変化を求めたいが意のままにならないストレスを表現した。(譜例3)



譜例4 Healing (癒やし)

「Healing」では、ペダルを踏みながら、5度重ねのハーモニーを反復する。適宜、即興で短い旋律を右手で挿入する。4回～6回反復したところで、ハーモニーを平行移動させる。アンビエントな雰囲気、束の間の癒しを表現した。(譜例4)

「Shake」は低音のドローンの上に、即興的な和音をのせたオスティナートである。(譜例5)に示した和音は例で、指を一本ずつずらして、和音を変化させるのも

効果的である。



譜例5 Shake (動揺)

即興、オスティナートで、不安定な音楽の合間に、旋律やハーモニーが明確な曲も配置した。(譜例6～8)これにより、落ち着きや安定感が生まれた。「Future」は3テイクあり、終曲のリプライズは、サウンドトラックでいうところのエンディングタイトル曲となった。



譜例6 Future (未来)



譜例7 Grandma (おばあちゃん)



譜例8 Girl's dream (少女の夢)

これらの譜例は、いずれも旋律部を記譜したものである。演奏時は、コードネームに従って伴奏をつける。

曲集「LIFE -Sound Sketch for Kyarako-」はドラマ的要素があり、リプライズを挿入したことによって、映像作品のサウンドトラックのような音楽になった。

(3) 青呼「きゃら子の世界」展のための音楽

東京国際フォーラム内のギャラリーで開催することとなり、よりGeneralなスペースでの個展となった。きゃら子誕生の背景を知らない人の方が多い。今回はきゃら子、ぶぶ子のキャラクターを全面に出すこととなった。青呼氏とのコラボレーションも3回目となり、音楽の内容や使用する楽器、制作方法も、筆者に自由に任された。ただし、今回は、コンサートの日程が先に決まり、会場で生演奏を行うことを前提に、音楽制作に取りかかった。

会場で生で演奏する、しかも2日間に渡って4回のコンサートを計画した。そこで、音楽だけでも自立した作品、再現性も求めたいと考え、演奏よりも先に楽譜を書くことにした。また、青呼作品の中から筆者が選んだ12枚の絵を対象に音楽を作曲し、12曲から成る組曲とすることにした。

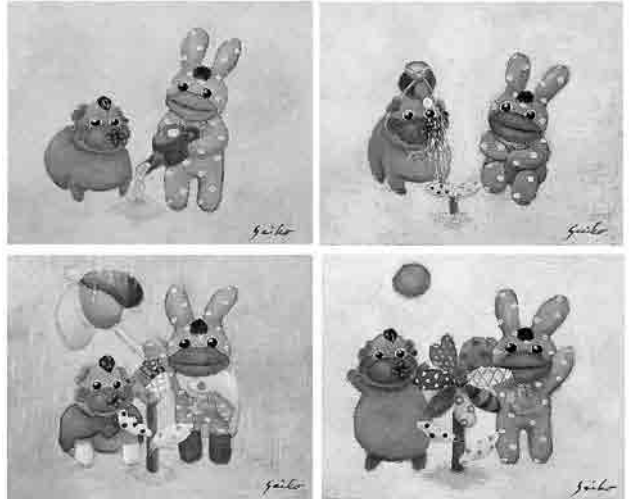
kyarakoの休日

Seiko作品のイメージによるサウンド・スケッチ

- 01 Prelude -七色の花 1-
- 02 きゃら子とぶぶ子の誕生会
- 03 きゃら子とぶぶ子のプチ旅行
- 04 心を込めて
- 05 Interlude -七色の花 2-
- 06 夢の中
- 07 背比べ
- 08 面影
- 09 Interlude -七色の花 3-
- 10 よし、旅に出るぞ
- 11 巡る想い
- 12 Finale -七色の花 4-

絵をモチーフにした組曲といえば、ムソルグスキーの「展覧会の絵」が有名である。「展覧会の絵」では「プロムナード」という冒頭、および曲間をつなぐ小曲があ

る。入り口や絵と絵の間の移動を表現したものとされている。これに習って筆者も、青呼作品の中にあつた4枚の連作「七色の花」をモチーフに「Prelude」「Interlude」「Finale」を作つた。



作品3 七色の花 1-4



譜例9 Prelude -七色の花 1-

第1曲「Prelude -七色の花 1-」は、ドリア旋法をもとにした二声の音楽である。小節線はなく、厳肅な雰囲気で行演奏してギャラリーへの入場を表す。ここで、二人の主人公、きゃら子とぶぶ子を紹介する。(譜例9)



作品4 きゃら子とぶぶ子の誕生会

個展の案内葉書にも用いられた「きゃら子とぶぶ子の誕生会」は、誕生会が待ち遠しい気持ちを、下行してはトリルで跳ね上がる音型で表現した。(譜例10)



譜例10 きゃら子とぶぶ子の誕生会

「きゃら子とぶぶ子のプチ旅行」は、青呼氏から送られてきた絵の写真が無題であったため、筆者の勝手な想像をもとに作曲した。その絵は家に車輪がついて走っており、魔法の世界のようなミステリアスな印象であった。全音音階によるオスティナートは、増三和音や減七和音と交錯し、独特な和声感を漂わせる。(譜例11)



譜例11 きゃら子とぶぶ子のプチ旅行

前曲から一転して、続く「心を込めて」は、誰もが鼻歌にできるようなわかりやすい旋律をもたせた。(譜例12) 中間部をはさんで、同じ旋律を繰り返すが、最後は、半音高い変ロ長調に転調する。



作品5 心を込めて



譜例12 心を込めて

「Interlude -七色の花 2-」は、第1曲「Prelude -七色の花 1-」のドリア旋法による旋律に、並行しながら微妙に変化するハーモニーをつけた。(譜例13)



譜例13 Interlude -七色の花 2-

「家具の音楽」の提唱者であるエリック・サティの音楽はBGMのルーツと言われる。この「夢の中」の左手のリズム、ハーモニーはサティの「3つのジムノペディ」を意識している。(譜例14)



譜例14 夢の中

「背比べ」は右手、左手の二声で、きゃら子と「ぶぶ子」の会話や背の高さを競いながら興奮していく様子を表現した。音列技法ほど厳密ではないが、あえて、近いところでは同じ音を使わないことによって、調性感をなくしている。



作品6 背比べ

また、ペダルを踏みっ放しにして、弦を共鳴させ、倍音の増幅や干渉によって、耳鳴りのように響く音の効果をねらった。しかし、個展会場でのコンサートでは、電子ピアノを用いたため、この効果はあまりなかった。(譜例15)

「面影」は「背比べ」の最後の緊張を緩めるための音楽である。(譜例16)



作品7 面影

「Interlude -七色の花 3-」では、元になった旋律のへ、ハ、ト音のみを、イ長調の調号にそって上方に変位させると、厳かな雰囲気から、優しく温かい雰囲気の音楽になった。(譜例17)



譜例15 背比べ



譜例16 面影



譜例17 Interlude -七色の花 3-

「よし、旅に出るぞ」は青呼作品のファンの中で「なぜ、夕方の三日月に旅に出るのか」という疑問の声が上がった絵である。これに対して、青呼氏は「きゃら子とぶぶ子はただ楽しいだけの旅に出るのではなく、この先に出くわすかもしれない困難をも乗り越えるつもりで旅に出るの



作品8 よし、旅に出るぞ

です。」と答えている。この絵のための音楽は二人への応援歌とした。(譜例18)



譜例18 よし、旅に出るぞ

青呼作品には、線路が多く描かれている。ギャラリーでは、線路は絵をはみ出して、絵と絵をつないでいる。「巡る想い」は、人と人との想いを結ぶ「絆」をイメージして作曲した。(譜例19)



作品9 巡る想い



譜例19 巡る想い

線路は平坦ではなく、紆余曲折している。人と人の「絆」もよじれたり、切れかかったりする。中間部では、8小節ごとに同じ音型が転調し、原調のハ長調に戻る。離れては、また結ばれる「絆」を表現した。(譜例20)



譜例20

「Finale -七色の花 4-」は、「Prelude」では二短調に近かった旋律が、確固たるハ長調の旋律として現れる。(譜例21)



譜例21 「Finale -七色の花 4-」

テーマは2度繰り返して、8小節の短い中間部を経て、再びへ長調のテーマに戻る。やがて、冒頭のモチーフを用いて上行し、終止する。終結部は回想シーンである。冒頭と同じく二声の対位的な音楽となり、厳粛さを取り戻して、全曲の終結となる。(譜例22)

譜例22

9 おわりに

ギャラリーのための音楽づくりは、作家とのコミュニケーションによって、イメージを共有することが、大切である。イメージの共有がなければ、音楽の内容、制作方法、作曲技法の選択もできない。

目でとらえた作品の印象、作品題、作家の言葉から、イメージを得ることはもちろん、背景にある作家の生き方、姿勢にふれることも重要である。青呼氏とのコラボレーションは、同郷であることや同じ経験を持っていることによって、イメージの共有は容易であったかもしれない。しかし、それ以上に、青呼氏の姿勢から学んだことは大きい。

画家は、自己の内的イメージを、「色」「形」「線」「動き」等でキャンバス上に描いて表現する。それは視覚的な刺

激となって、直接、見る者に伝わる。しかし、音楽の場合、例えば、作曲家が書いた楽譜は、確かに「旋律」「ハーモニー」「リズム」等を記号化して記したものはあるが、それ自体では、聴覚的な刺激とはならない。演奏という音信号への変換作業を必要とする。

もちろん、美術においてもスケッチ、デザイン画や型作り、設計図等、制作前に準備作業は当然行われている。しかし、一人の作家の手によって、構想から作品完成まで完結されている場合が多い。

音楽、特にクラシックの場合は、作曲家と演奏家が分業化している。したがって、音楽家同士のコラボレーションは日常的である。しかし、筆者自身の創作活動を省みると、楽譜に記すまでが全てで、(当然、演奏者を信頼してのことではあるが)後は演奏者に任せきりという無責任なコラボレーションが多かった。

本論で述べた一連のコラボレーションを通し、青呼氏の、イメージの創出から、作品制作、作品発表に至る全過程に責任を持つ姿勢には、敬服の意を表すほかない。自分の中で生まれたイメージが、作品を見る人聴く人に取り込まれるまで、創造エネルギーが継続している。さらには、来場者の声にも耳を傾け、そこから、また新たな創作へのモチベーションを高めている。

青呼氏は、自身のブログの中で、こう述べている。(一部、中略している。)

お客様に「目の見えない方が聴いてもこういう絵なんだろうなとイメージできるぐらいぴったりの曲」と感想を頂きました。きゃら子の世界は絵が主です。音楽なら目の見えない方にもきゃら子の世界をお届けできるかもしれない。

このきゃら子の世界は、まずは大人の人に観てもらいたい作品です。闘病中の娘を介護する中で、娘にいくら本を読んでも話しかけても、私に笑顔がなければ子供は笑いませんでした。私に笑顔があれば、娘はそれだけで笑っていました。大人が元気になれば、それだけで子供は笑顔になれる。

誰もが観て分かりやすいきゃら子とぶぶ子の世界、娘も私の描いたきゃら子を満面の笑みで観てくれました。そして、子供の笑顔で、親は幸せを感じます。

会場に入られたお客様が口々に、「子供に見せたら喜ぶわ〜」と言いながら、ご本人が喜んでおられる姿に、

伝わる嬉しさを感じます。

本研究は、筆者自身の今後の創作活動における方向性を見出すうえで、大変有意義であった。さらに、本論で述べたコラボレーションの意義や音楽制作上の方法論は、教育活動にも応用できる。

参考文献・資料

1. 野村誠・片岡祐介／音楽療法のセッション・レシピ集「即興演奏ってどうやるの」／あおぞら音楽社／2004
2. 杉林英彦・井上洋一・森山伸／芸術文化課程選択必修科目「芸術コラボレーション演習」に関する教育実践研究／愛媛大学教育実践総合センター紀要No.30／2012
3. kyarako factory ホームページ
<http://www.kyarako.jp/>